

称号及び氏名 博士(看護学) 田中 登美

学位授与の日付 平成28年9月25日

論文名 初めて化学療法を受ける就労がん患者の役割遂行上の困難への対処を促す看護ケアプログラムの開発と評価
ー乳がん患者に対する看護ケアプログラムの評価ー

論文審査委員 主査 田中 京子
副査 箕持 知恵子
副査 杉本 吉恵

論文内容の要旨

【目的】

就労世代のがん患者の増加を背景に、がん治療時の離職予防のための支援が求められている。本研究では初めて化学療法を受ける就労がん患者の役割遂行上の困難に関する実態を明らかにし、「役割遂行上の困難への対処を促す看護ケアプログラム(以下、看護ケアプログラムと略す)」を開発すること、および看護ケアプログラムの有効性および実用性を検討することを目的とした。

【方法】

1. 初めて化学療法を受ける就労がん患者の役割遂行上の困難に関する実態(予備研究)

初めて化学療法を受ける就労がん患者の役割遂行上の困難に関する実態を明らかにすることを目的に14名の就労がん患者に半構成的インタビューを実施し、質的に分析した。その結果、病気や治療が仕事上や家庭内の役割に及ぼす影響がわからないこと、体力的な負担によるつらさや心配があること、家族や他者につらさを言えないこと、役割遂行上の困難に対する家族や他者の支援が不十分であること、心配や不安や恐れなどの情動反応という困難を抱えていることが明らかになった。就労がん患者が役割遂行上の困難に対処するには、患者自身が病気や治療が仕事上や家庭内の役割に及ぼす影響を理解した上で先の見通しをもち、家族や他者との関係の調整や支援を求める方略について考えること、患者のつらさを看護師が受けとめながらプロセスをとることにすることの必要性が示唆された。

2. 看護ケアプログラムの開発

文献検討および予備研究の結果をもとに、「就労しているがん患者が初めて化学療法を受けることにより抱える役割遂行上の困難に対処しながら役割を継続することができる」ことを目標とし、副作用の発現時期に合わせて役割遂行ができるような教育的支援、病名を開示してサポートを受け

ながら役割を継続することの意味を見出すことができるような教育的支援、自分の役割を整理・分析してサポートを得る方策を練ることができるような教育的支援、役割遂行に関わる情緒的支援を構成要素とする看護ケアプログラムを開発した。介入は、治療決定日、治療 1 サイクル目初日、治療 2 サイクル目初日の計 3 回の対面式個別介入とした。教材として役割遂行上の困難と対処に関する情報、役割分析シート、役割選定カード、治療カレンダーを含んだ役割分析のための冊子を作成した。

3. 初めて化学療法を受ける就労がん患者に対する看護ケアプログラムの有効性と実用性の評価

1. 対象: 外来および短期入院で根治目的の化学療法を初めて受ける 60 歳未満の就労乳がん患者。対象者は介入群および対照群の 2 群とし、介入群は通常ケアと看護ケアプログラムを行い、対照群は通常ケアのみとした。2. 研究デザイン: 事前-事後テストコントロールを伴う準実験研究デザイン。3. データ収集期間: 2013 年 6 月～2016 年 5 月。4. 研究協力施設: がん診療連携拠点病院 3 施設。5. データ収集内容・方法: 1) 患者背景として性別、年齢、臨床病期、治療内容、Performance States、雇用形態、家族構成などについて記録調査を行った。2) 有効性の評価; ①〈work-family-conflict〉work-family-conflict scale(以下、WFCS と略す)、②〈役割遂行状態、役割遂行に対する満足状態〉役割遂行状態・満足状態測定尺度(以下、役割遂行・満足と略す)、③〈不安と抑うつ〉Hospital Anxiety and Depression Scale(以下、HADS と略す)、④〈QOL〉Functional Assessment of Cancer Therapy-General version4(以下、FACT-G4 と略す)について、ベースライン(T_0 : 治療決定日)、介入中(T_1 : 治療 2 サイクル目初日)、介入後(T_2 : 治療 3 サイクル目初日)の

3 時点で、質問紙調査を行った。 T_2 の時点で役割遂行に対する主観的評価の面接を行った。3) 実用性の評価; T_2 の時点で看護ケアプログラム評価質問紙を用いて介入群に行った。6. 分析方法: 両群の属性比較には t 検定または χ^2 検定を、 T_0 - T_2 の変化量の群間比較には Mann-Whitney の U 検定を行った。SPSS19.0 for Windows を使用し有意水準は 5%とした。面接結果は質的帰納的方法で分析した。7. 倫理的配慮: 大阪府立大学大学院看護学研究科研究倫理委員会の承認(承認番号:24-61)および研究協力施設の倫理委員会の承認を得て実施した。

【結果】

1. 対象の概要: 介入群は 15 名、対照群は 23 名で、全員が女性であった。対照群のみ T_0 - T_1 間で治療中止により 4 名が脱落した。その結果、分析対象者は介入群 15 名、対照群 19 名となった。平均年齢は介入群 47.0 \pm 9.25 歳、対照群 46.6 \pm 7.37 歳で、ベースライン(T_0)で HADS の抑うつ得点は介入群が有意に高かった(両群とも正常範囲内)が、患者特性、WFCS などの得点には両群間の差はなかった。2. 看護ケアプログラムの有効性: 介入群では T_2 の時点で全員が就労を継続していたが、対照群では T_1 - T_2 間で 3 名が退職、4 名が休職し、有意な差があった($\chi^2=6.96$, $df=2$, $p < 0.05$)。仕事を継続していた介入群 15 名と対照群 12 名の T_0 - T_2 の変化量を両群で比較すると、WFCS の下位尺度 FIW-S (Strain-based family interference with work)が介入群で有意に

低くなり(p=0.031)、家庭内役割遂行状態は介入群が高い傾向(p=0.081)であった。その他の指標には差はなかった。3. 看護ケアプログラムに対する実用性の評価:看護ケアプログラムの負担感(情報量、時間)、内容、介入時期や回数、働きかけについて全員が概ね適当～適当と回答した。介入の開始時期と看護師と一緒に考えるという働きかけの適切性の得点が特に高かった。

【考察】

治療2サイクル目から3サイクル目の間に対照群では退職もしくは休職する対象者がいたが、介入群では全員が就労を継続していた。また介入群において、家庭内役割遂行状態を維持しつつFIW-Sが有意に低くなったことは、患者が家庭内の役割を遂行しながらも感じるストレス反応が仕事上の役割期待を阻害する場合に生じる葛藤が少ないことを意味する。これらの結果から、本看護ケアプログラムは、役割遂行上の困難へ対処しながら役割を継続することができるという点において効果があったと考えられた。治療開始前から介入を行ったことは、体力のある時に余裕をもって調整する行動ができることに繋がり、治療による身体・生活面での影響について見通しをもつことは、今後の自分の生活をイメージ化させることとなり、患者に心の準備をさせることに繋がったと考える。また自分の役割をカードに整理し代行可能か不可能かを分析したことは、自分の仕事上や家庭内の役割を意識化することとなり、体調に合わせた役割の移譲や一部代行の調整行動へと繋がった。さらに介入時に患者の対処した内容について確認しながら患者の努力を認め、対処方法を修正したことが患者の自己効力感を高めることへと繋がり、治療初期の退職、休職を予防することができたと推察される。そして看護師が相談相手になることを伝えたこと、患者のつらさを汲み取ったこと、役割を継続する際に周囲の支援を得てよいこと、周囲の支援を得る方法を伝えて励ましたことにより、他者へ役割調整を行う際の負担感を下げることができたと考える。

今回は全員が女性乳がん患者であったため、今後は他のがん種や男性を対象として有効性を確認することが課題である。

キーワード：就労がん患者、化学療法、役割遂行、work-family-conflict、対処

学位論文審査結果の要旨

近年、がん患者は集学的治療を受けることが多く、特に化学療法を受ける患者は増加している。副作用の少ない抗がん薬の開発と支持療法の発展、内服抗がん薬の開発に伴い、就労を続けながら化学療法を受けるために外来通院を続けるがん患者も多くなっている。本研究は、初めて化学療法を受ける就労がん患者が抱える役割遂行上の困難を明らかにして、その困難への対処を促す看護ケアプログラムを開発し、その有効性と実用性を検証したものである。

化学療法を受けるがん患者の就労支援については、未だ十分な学術的研究が蓄積されていない中、患者の病者役割と仕事上の役割、家庭内役割が葛藤を起す点に着目して、役割遂行を促すための看護ケアプログラム開発に取り組んだ点は、先見性が認められ、新規性に富んだものとして評価できる。就労がん患者が抱える役割遂行上の身体的・心理社会的な困難と対処および医療者に求める支援を明らかにした予備研究の結果を緻密に分析し、文献的考察とを合わせて、副作用の発現時期に合わせて役割遂行ができるような教育的支援、病名を開示してサポートを受けながら役割を継続することの意味を見出すことができるような教育的支援、自分の役割を整理・分析してサポートを得る方策を練ることができるような教育的支援、役割遂行に関わる情緒的支援を構成要素とした看護ケアプログラムを作成した点は、独創的であり優れている。看護ケアプログラムの検証は、通常のケアに加えて看護ケアプログラムを適用した介入群（15名）と通常のケアのみの対照群（23名）とを比較する準実験研究デザインを用いた上で、役割遂行上の困難に対処した結果としての適応状態を、役割葛藤、役割遂行状態、役割満足状態、不安と抑うつ、QOLの観点から緻密に分析しており、方法論的にも妥当なものとなっている。結果として退職、休職者が発生した対照群と比べて、介入群では全員が就労を継続しており、役割遂行上の困難へ対処しながら役割を継続することができるという点において看護ケアプログラムの効果が認められたことは、就労継続を目指す化学療法を受けるがん患者にとって意義深い重要な成果といえる。仕事を継続していた介入群15名と対照群12名の両群比較では、家庭内役割が仕事役割に与える葛藤が介入群で有意に低かったが、その他の指標において明らかな差がみられなかったことについても緻密に分析を行い、抑うつや不安との観点から考察を加えている点は評価できる。しかし、対象患者全員が女性の乳がん患者であったことから、今後は他のがん種や男性を対象として有効性を確認することが課題であるといえる。

本論文は、がん看護学における実践・研究の発展に寄与する学術的価値を有しており、博士（看護学）の学位を授与するに値するものと認める。